

---

# **チート野郎の異世界を巡る旅～ネギま！編～**

18439

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チート野郎の異世界を巡る旅～ネギま！編～

### 【著者名】

ZZマーク

### 【作者名】

18439

### 【あらすじ】

チート野郎が頑張るお話です。

初投稿なので、生温い田で見守ってください。

誤字脱字見つけましたら「報告宜しくお願いします。

## プロローグ

キキー！バンッ！「ロロロロー！グシャ！」

ハツ！

「知らない天井だ……は？」

え…ナニココ…俺知らないよ？何この驚きの白さ…ホードモビ  
ツクリだよ！あれ？ホー ドだけ？

……まあいいや、取り敢えずテンプレで回想するか。

### 回想

俺の名前は『有馬 哲平』何処ぞのHロゲの主人公と同じって言った奴出てこい、全力で謝る！

歳は21だ。仕事は中学で教師をやっている。

教師を目指した理由は聴かないでくれ……不純すぎて自分が惨めになる……

まあだいたい想像は着くと思うが俺はオタである。

俺の話はここまでにして、んで俺は仕事に向かうための道で信号待ちをしていたんだ……まあ当時の出来事をどうぞ

「ふあ～～」

あ～猛烈に眠い… 昨日は遅くまで恋姫やつてたからな…  
キヤー！危ないぞー！ 戻れー！

なんだ、俺の微睡みを邪魔する

…… 今の状況を説明しよう、信号変わった 小学生の女の子走る  
トラック突っ込んでくる 激突まであと数秒（今こい）

「チイ！ テンプレ過ぎんだろー！」

そう呟くと何故か俺は走っていた。

「ツオオオオオオオオオオ！」

勢いに任せて女の子を突き飛ばすと、何が起こつたか分からない顔  
をしていた。

「笑顔くらいみ」

キキー！バンッ！「ロロロロ！グシャ！」

【回想終了】

「ここには、ここは死後の世界ってやつか？」

咳くが返答はない。嗚呼一人つてさみ「そつよ」

「つて居るのかよ！」

「あら、酷いわね」

後ろをむくと……自分は神だと言い出しそうな美人がいた。

「貴女が……神か？」

## プロローグ（前書き）

すみません…まだこのシステムを使いこなせなくて…  
何故か分割されました。

## プロローグ

「ええ、私は神様よ」

「うわあ～やつぱだ…」

「こことは、アレですか？」こは死後の世界と？」

「さうよ、ああ面倒だから説明しちゃうわね、貴方は本来死ぬ時は無かつた時に死んだの、理由は貴方が助けた女の子、あの子は本来あそこで死んで人生に幕を閉じる筈だった…」

「そこに俺が割って入ってしまった…か？」

「そつ、貴方は因果をねじ曲げてあの子の死を消したの、自身の死を持つてね」

「あ…これは転生とかじやなく地獄逝きか？」

「いえ、貴方はこのまま異世界に旅立つて貰うわ」

「ひょ？」

「貴方は死ぬべきでは無い時に死んだ、それによつて世界は貴方といつ杵を消したのよ、貴方がやつたことは良い行い…」のままは可哀想だわ、と言つことで異世界へ放り込むの

なんだ…と？

「その異世界とは？後、特典なんかは…」

まあ駄目元だがな

「貴方が旅立つ異世界は『魔法先生ネギま!』の世界よ。特典は… そうね、6個まで叶えてあげる、ああ、不老はテフロだから」

不死は無いのか？ まあいいや、その方が面白そうだし それに『ネギま!』か… ネギ君の性格や考え方はどうにかしてやらねばな…

「それじゃ 一つ目は『ラディカル・グット・スピード』、二つ目は『直死の魔眼』式と志貴のが合わさったやつで脳の負担ゼロで、三つ目は『投影魔術』英靈エミミヤ張りので、四つ目は『容姿』空の境界の式で、五つ目は『才能』何でも極められる用に、六つ目は『魔力と氣をその世界最大の魔力又は氣を持つ人の一倍』これでお願いします。」

うわあ… 欲張り過ぎたか？  
神様苦笑いしてゐし…

「分かったわ、これからあちぢりに送るけど、何があるかしら？」

「送る時はやっぱ床に穴が開くんだろうな… よしー

「それじゃ一つだけ、落とすのはや… あれ？」

スッと床に穴が開く

「行つてらっしゃい

「そんな笑顔でいわれてもおおオオオオオオオオ！」

「ひで俺の意識は途絶えた

## プロローグ（後書き）

取り敢えず次回から原作世界に行きます。

あれは……人なの……か？

「俺 絶 贊 落 下 中」

しかしどうするか、魔力も氣も使い方知らんしな……

ティーン！ ときた！

「速度を落とせないなら、加速だ！」RG5、脚部限定解放！逝くぜエエエ！俺の速さは世界一いいいいいいいい！！

フハハ！これが最速！これが速さ！

ドジイイイイイン！

「イテテ、やり過ぎたか…」

無事？着地できたはいいが……ん？手紙？

『この手紙を読んで居ると言つ事は、無事着いたようね、貴方の能力の一つの『投影魔術』だけど、『固有結界』発動可能にしといたわ、貴方が生き残る事を期待してゐるわ。なおこの手紙は読み終えた時、笑いだします（笑）』

「ハツハツハツハツハツハツハツハーハー、ハーハツハツハツハツハツハーハー」

「どうしたんだよー。」

手紙を破く

まあ、固有結界は嬉しいけどね……あれ？これチート過ぎね？

「ヤバ」の侵入者…

「ヤバ」の画伯ボイスはもしゃー…

「俺のことかい？」

せっちゃんや～！さなり原作キャラに会えるとはー。  
だが何故か不穏な空気が…

「貴様以外に誰が居ると言つのだ」

あちやー…不味いな……あ、そりだ

「まあまあ、そんなにカリカリしなさんなお嬢さん、」

「…………」

返答無し、か

「所でお嬢」「それで呼ぶな！」済まないな、それじゃ本題に入る  
が、この最高責任者に会わせてもらえないか？」「

この分だ良い返事は貰えそう無い…か？

「断る

やつぱりか…なら…

「実力行使…か」

彼女は無言で愛剣『夕凪』を構える  
俺も彼女も先手を取ろうとはしない、相手の戦闘スタイルが解らな  
い限り必ずしも先手が有利と言つわけでも無い。

「つ！」

彼女が動く……が

「そこまでだよ、刹那君」

「た、高畠先生！？」

かのデスマガネが割つて入つてきた

「！」の場合、2対1ということか？

正直キツイ、力は手にいれたばかりで使用法も定かではない

「いや、君には僕と一緒に学園長に会つて貰うよ

「了解した」

「刹那君も戻つていいよ」

「分かりました、では失礼します」

と、一礼しその場を立ち去つとするが

「あ、君…名前は？」

「桜咲 刹那」

「桜咲君か、俺の名前は有馬 哲平だ、それじゃあな

また一礼しその場を立ち去る

「さて、それじゃあ行こうか」

「ああ了解した」

所変わつて学区内

むひ…やはり注目を集めんな…学園の有名人と式の容姿（男が見た  
ら美女に、女が見たら美男に、中性的な容姿）だからかな？

「そう言えば自己紹介がまだだったね、僕は タカミチ・Ｔ・高畑」

「俺は 有馬 哲平だ、哲平でいい」

「じゃあ僕もタカミチで良いよ、それとわざと刹那君に何か言おつ  
としてたけど言わなくて良かったのかい？」

「年長者からアドバイスでも、と思ったが…あの様子だと聞いてく  
れそもそも無かつたからね」

聞いたとしても聞き流しそうだし

「どんなアドバイスを?」

まあ式の、式の爺さんの言葉だが…

「人は一人しか“人”を殺せない…人は一人分の死しか背負えないからな、あの真っ直ぐな子だ、いずれそう言った場面に出会った時に、とね」

背負えない物を無理にでも背負おうとするだろうからな

「……………そう、かも知れないね」

「まあ、片隅にでも置いといてくれ」

沈黙の中学園長室に向けて歩く

学園長室

「コンコン

「失礼します」

タカミチに続いて俺も中に入ると……

「タカミチ……あれは…人なの…か?」

「ふお！初対面で酷い事を言うの?」

原作見てても思つたが絶対人じやないと思つ、特に後頭部

「哲平君、『じちらが』の麻帆等学園、学園長」

「近衛 近右衛門じや」

妖怪が自己紹介か…

「俺は 有馬 哲平」

れて、どんな質問が飛んでくるやう

「それでは、三つほど質問してもいいのかの?」

「ああ」

「それでは一つ田じやが、君はこの世界の人間かの?」

田付きが変わったな…質問も直球だし…素直に答えるべきか

「いや、ここから言えば異世界から来た。」

「ほ、何でかの?」

「前いた世界に俺の存在枠を消されてね」

嘘じやないからな、と念を押す

「では、二つ田じやが、君はこの学園に害をなす者か、じや

「いや、ここで暴れようなどと考えてもないよ」

折角来たのに目を付けられるような真似するかよ

「最後になるが、ここで働くかんかのう？」

「なー学園長ー！」

タカミチが動く…まあ得体の知れないものをいきなり駒に加えようとすると妖怪が異常なんだがな…

「それは、得体の知れないものを野放しにするより飼つてたほうが対処しやすいと？」

「じつ取つてもさうしても構わんよ」

ふおふおふおふお、とバルタン笑いをする妖怪

「まあ使われてやるよ、ただ条件がある一つ、住居、一つ、戸籍や個人情報の作成、だな」

「了解じゃ、君にせつてもさう仕事は、広域指導員、中等部女子寮管理人、あとは警備員かの、じゃから君の住居は女子寮の管理人室になるのう」

「はあ…了解した、女子寮に案内頼む」

「ここで今まで空氣だつたタカミチが動く

「分かったよ、案内中に仕事の事も話しておこう

「それじゃ、頼んだぞい」

## 主人公設定（前書き）

今更ですが、能力の説明など

## 主人公設定

名前 有馬 哲平  
アリマ テツペイ

性別 男

好きなもの

辛いもの タバコ 二次元 小動物

嫌いなもの

甘過ぎるもの マンゴー 怖い映画 冷たい食べ物

能力

能力名 ラティカル・グッドスピード（RGD）

原作 スクライド

車などの乗り物を自分専用の超高速仕様にできる他、脚部限定や、  
最終形態等が可能  
フォトンブリッジ

能力名 直死の魔眼

原作 空の境界（月姫）

「モノの死」を視覚情報として捉えることのできる眼。式の直死は、精神を集中させれば、生きている「モノ」なら何でも死の線又は点が見える。志貴の直死は、式ほど多くの「モノ」の死の線又は点は見えないが、線と点を細かく見ることが出来る。

能力名 投影魔術

原作 Fate

其処には無い物を造ることの出来る魔術。本来は1から造る魔術だが、神様により、固有結界「無限の剣製」を与えられ、『造る』のではなく、『取り出す』形になった。（通常の投影も可能）

## 顔合わせ（前書き）

地の文が少ない…

すみません、これが私の今の限界です…

## 顔合わせ

女子寮管理人室

「リリがこれから君が住む部屋だよ」

ほう、中々の部屋だな…しかし、男が女子寮の管理人つていいのか?

「部屋は了解したが……いいのか?男が女子寮の管理人つて

思つた事をそのまま質問として投げ掛ける

「んー、問題行為が無いなら良いんじやないかな?」

えらくテキトーだな!おい!

「まあ、問題ないならいいが…」

「ああ、それと今日の深夜11時にさつき案内した世界樹の広場に  
来てくれないかい?」

「デートの誘いか?やめてくれよ、俺は至ってノーマルだぞ?」

想像しただけで身震いするわ

「ハハハ、違うよ、この学園の魔法先生や魔法生徒との顔合わせさ

顔合わせ……ね、一悶着ありそうだが…

「了解した」

「それじゃ、また後で」

後ろ手に手を降りながら去っていく

「さて、買い物でも行くかね」

服が今着てる着流ししかないからな、赤い革ジャンと新しい着流しが欲しいな

世界樹前の広場

盛大に時間がぶつ飛んだ氣がする…

「ふおふおふお、待つておつたぞ」

妖怪…もとい学園長か、周りにいるのが魔法先生、魔法生徒か

「皆、今日より僕等の同僚となる 有馬 哲平君じゃ」

その言葉に俺に会釈する者、警戒する者、無関心な者、様々な反応を見せる

「紹介にあずかった有馬だ……学園長、まさかこれだけの為に呼んだのか？」

この狸がこれだけな筈がない

「ふおふおふお、哲平君にはこれからタカミチ君と手合わせをして貰いつ

急に周りがざわめきだす。 無理だ 勝てるはずがない 等  
と言ひ出す

「いいぜ、やるつかタカミチ」

正直、実戦経験の薄い俺では勝てるかわからない

「やれやれ、君も血氣盛んだね」

タカミチはポケットに手をいれ、俺と向かい合つ

「俺は実戦経験が薄くてね、経験を積むには良い機会だ」

ナイフを投影し、切つ先をタカミチに向ける

「勝敗は儂が勝負ありと見定めるまでじゃ……それでは、始めえ

い！！

俺は直死の魔眼を起動し、精神を集中させる

「それじゃ、いくよ…っ！」

タカミチは俺の顎に居合い拳を放つが、その拳圧の線をなぞって拳圧を『殺す』

「な！？」

タカミチが驚いていた内にRGDSを脚部限定解放し、懷に潜り込む

「ふ！」

ナイフをタカミチの喉に向け放つ

キン！

が、拳でナイフを腕ごと打ち上げる。

その反動を利用して、駒のように回りながら、ラッシュをかける

「オオオオオオオー！！」

今までの回転を止め距離を取つたタカミチにナイフを投げる

「シッ！」

タカミチはナイフを居合い拳で弾くが…遅い！

新たにナイフを投影しRGDSでタカミチの背後に周り、

「チヨックメイト」

「参ったよ

「そこまで一勝者は哲平君じゃー」

「また周りが騒がしくなる  
メンドクサイ事になりそうだな……」

「学園長、俺はこれで帰る、必要な時にまた連絡してくれ、じゃあ  
な」

「待ってくれ！君の使ったのう！」

ガングロのが話し掛けて来るが無視だな

「ラディカル・グッドスピードー！脚部限定！逝くぜ俺は風になる！  
ヒヤアッフォオウー！」

フハハ！帰ると決めたら帰るのでー！

顔合わせ（後書き）

展開が速すぎるわー！

金髪幼女あらわるー（前書き）

遅くなりました

見てやつてくれる嬉しくです

## 金髪幼女あらわる！

「あ、哲平だよ。あの顔合せからしげらへたって、俺は今広域指導員としての仕事をしていたんだが…」

「おー貴様ー聞いてるのかー!?」

「ああ、聞き流す程度にな」

「それを聞いていなこと言つんだよー」

「どうしてこうなった…」

### 回想

「おっすー！オラ哲平ー！今仕事中！」

しかし広域指導員とは面倒だな、このバカデカイ学園を回らなければならぬからな…

考えていた最中にまた喧嘩だ…

「はあ……」

おつと、思わず溜め息がでた

「お前達、何を争っている

喧嘩をしている学生達に問う

「誰だ、お前」

「新しく指導員に配属された者だ  
ホレ、と証明書を見せる

「ここつ、ぶつかった事に謝りもしねえんだー。  
ぶつかって来たのはそっちだろー。」

はあ…小さいな

「両者共に謝れば良いだろ」

「「何で俺が謝んなきゃなんないんだー。」

「こつら仲良いだろ

「わうかい、じゃ…眠つて」

後ろに回り込み、手刀を首に入れ

「はあ…手荒い事でしか解決出来ない俺つて…」

まあいいや、解決は一応出来てんだし

「貴様、有馬哲平だな？」

「ん？」この金髪幼女はエヴァか

「そうだが、君は？」

「ヒュアンジエリン・A・K・マクダウェル」

ビンゴ、しかしそのエヴァが俺に何の用だ？

「貴様、前のタカミチとの試合で奴の拳圧を切る……いや、違うな…切つたのならまだ拳圧は『生きてた』だろう、貴様は拳圧を『殺した』な？」

おおう…この子凄いな…

つーことは俺が封印を殺せるのに気付いたか？

「ああ、その通りだよ。万物には全て生まれたときから綻びがある…俺の眼はね、モノの壊れやすい、又は死にやすい線が見えるんだよ…封印術式や拳圧だって例外じゃない」

やべ、余計な事喋ったか

「なつ…本当か？本当なのか…？」

あ～やつちまた、ジーするかコレ

「なら早速の呪々しい封印を消せー。」

はあ……どうするかなあ

「おー！貴様、聞いてるのか！？」

回想終了

本当に面倒な事になつた…あ、条件付きでやるか

「別に構わんが、条件付きでな」

「む、まあいい言つてみろ」

高压的だなあ

「一つ、俺の言つ」とを一つ聞いて貰つ、一つ、修行場として君の  
ダイオラマ魔法球を貸してもらいたい」

「一つは分かつたが一つはまだどういう意味だ？」

「時が来たら話すぞ」

「布に落ちんがその条件を飲もう

修行場確保！それに原作道理に進める為の布石もできたら

「すぐ封印を解くなら場所を変えよう」

「ここだと人目につくしな

「なら私の家に来るが良い、別荘の案内も含めてな」

「了解した」

金髪幼女あらわる！（後書き）

後書きって何書けばいいのかな？

**封印…解除！（前書き）**

中々原作に入れないので

文がなかなか纏まらなくて遅くなりました

封印……解除！

ハ'カ'ア'ンジ'ハ'コ'ン'サ'ル

「帰つたぞ」

「お帰つなさい、マスター」

亭主関白<sup>ドモシナ</sup>、憧れるつ……

「お邪魔しま<sup>す</sup>」

「おおっ、超ファンシー……」

「マスター、一いちの方は？」

「ジジイが新しく雇つた関係者だ」

「有馬 哲平だ、宜しく

「絡繹 茶々丸です。宜しくお願ひします」

本当にロボットこは見えないよな～

「おこ、有馬そひあひせぬのや」

「つよ～かい」

ナイフを投影する

「その魔法はなんだ？『転移系か？』」

ん～説明も面倒だしそれでいいか

「ああ、じゃやるわ！」

直死を起動し、フルに集中する。

「おーおー何だこれ封印術式らしきものが出来事に張り巡らされてるぞ…術式の点は…あつた、これをプスッと

「どうだ？」

「ああ！魔力が戻つて来る！フハハハ！これでこんな学園からおさらば出来る！」

それは不味い、せめて後3年は居てもうわなければ

「はい、ここで条件の一つを使つ、君が卒業まではここで居てくれ

「む、何故だ…と言つのは無粋か、分かつたよ  
「すまないな、おつと」

突然足の力が抜け、その場にドスンと座る  
あれを解除するのに精神を削り過ぎたらしい

「大丈夫ですか？」

「ああ、ちょっと精神が削れただけだ」

「これだけでヘタるとは、俺もまだまだなあ

「さて、そろそろ帰るかな」

「もう帰るのか、まだ別荘も見せていいこと言つの?」

「疲れたからな、修行はまた後日!」するよ

「そうか、では帰れ

エヴァの発言に苦笑いしながら玄関をでる

「有馬さん

「なんだい? 茶々丸さん

「宣しかつたのですか?」

ああ封印の事か

「いいんだよ、学園長こは俺が適当と言つとへし、それこ

「それに?」

「あーゆーの嫌い何だよね

「……」

まだ解らないかな?

「ま、それじゃあね

後ろ手に手を降りながらその場を後にする

## 学園園長室

あの後すぐ平び出しを喰らった…

「して、何故エヴァの封印を？」

「俺の氣まぐれさ

「気まぐれでそんなことをされても困るのう

「手綱は握ってるつもりだから安心すること」、もし何かあれば俺  
が動じる

エヴァの性格だからいつも反旗を翻すようなことはしないことと思つ  
がね

「むう… 今回の事は不問とするが… 次は相談してからにしてくれんかのう」

相談すりやいいのかよw

「ああ、了解した：それじゃあな」

数日後

「エヴァ～いるか～？」

俺はエヴァの家の前に来ている、理由？修行のためだよ

「ああ、入つてこい」

返答があつたので中に入る

「よお、早速だけど別荘使わせてくれ」

「分かった、ついてこい」

エヴァの後を着いていき、部屋に入るとそこには原作道理にボトルシップならぬボトルキャッスルがあった

「これが？」

「ああ、これの前に立て」

別荘の前に立つと一瞬、浮遊感があつた後目の前には城があつた

「ほお～凄いな」

「ふん、当たり前だろ？ それと、ここは外の1時間だ。出るにはいいで、1日過ぐしてからでなくしては出られねーからな」

「了解、それじゃ始めるか」

と、言つても何をやれば良いんだ?

ナイフを一刀投影してつと、アーチャーの動きを真似ながらナイフを振る

「虫々の動搖じゃないか」

暫くしたところでエヴァから声が掛かる

「そりゃどうも、そりだエヴァ… 魔法を教えてくれないか?」

について俺の修行は続していく

## 封印…解除！（後書き）

毎回短くてスマスマ

これから長く書けるよう努力します

## 原作突入！（前書き）

お待たせしました

お待たせしたわりにいつも道理短いです

申し訳ないです。

## 原作突入！

読者の皆久しぶり、俺がこの学園に来て早1年がたつた…ん？修行とかの描写はどうしたつて？

それは作者が面倒臭いと一蹴したから無しだ

それはそうと今田なんでもネギ君が来るらしい、所謂原作開始だんで俺は学園長に呼ばれ学園長室で待機してるところだ

コンコン、ヒノックの音がした

「入つて良いぞい」

学園長が返事をする、と  
バンッ！

女子生徒がドアを思いっきり開け放ち、ドカドカと学園長の所まで進むと

「学園長先生…！一体どーゆーことなんですか！？」

「少し落ち着いたらどうだ？神楽坂君」

女子生徒に声をかける

「あ、寮長さん」

何故原作キャラに知られてるかつて？  
寮長だからだよ

まあ、仕事はほぼ何もしてないがね

「んで、何があつたんだ？」

「」のガキが初対面にもかかわらず、『失恋の相が出てる』なんて言うんですー。」

ああ、あのイベントか

「わつか……では、君の名前は？俺は有馬 哲平だ

ネギ君の背の高さに合わせてしゃがみ、知ってるが名前を聞く

「ネギ・スプリングフィールドです」

「ではスプリングフィールド君、君は何故神楽坂君に対してその様なことを？」

「占いの話をしてたようなので親切で……『良いかい？君はまだ若いから許されるが、君は教師と言つ職業に就くのだろう？それならば親切とお節介の違いくらいは理解すべきだ。何事も相手の立場に立つて考えるのだな』…………そうですね、すみませんでした」

素直に神楽坂君に謝るネギ君

「だ、そうだぞ？神楽坂君」

謝る事は一番大事だが、それを許される事も重要だ

「うう……良いわよ別に、もう済んだことだし……」

パツと顔を上げ、表情を明るくするネギ君

「ほん、そんな良いじゅうつか？」

あ、学園長の存在をすっかり忘れていた

「あ、はい！」

「ネギ君、君には2・Aの担任をして貰つ、有馬君には副担任として補佐をお願いしたいのじゃが」

んー、一応元の世界のだが教員免許は持つてゐしな

「了解した」

「つむ、では早速お願ひしようかの」

おーおい、引き継ぎ作業も無しごときなりか…

「はい！分かりました！」

まあネギ君がやる氣ならいいか…

二〇一

「では、まず僕が行きますね」

そう言つてネギ君が扉に向かう

そういうや、エリックとかがあつた氣

ボフツ、バインツ！カボンツ！ドンツ！

あら、気が付くのが遅かったか  
しかし強烈な歓迎だなあ

力

もしかして俺忘れられてる…？

ナニヤー！

これはアスナといいんちょの喧嘩かな？

「神楽坂君に雪広君、女の子が取つ組み合ひってのは駄目なんじゃないか？」

30人が一斉にこっち向くと怖いな…

「取り敢えず全員席につけ~」

ガヤガヤ言いながら全員が席につく

「名前は知ってると思うが有馬哲平だ、スプリングフィールド君の補佐で副担任をやることになった、これからよろしく頼む」

「はい!質問!」

あれは桜子か

「なんだ?」

「なんでいきなり教師に?」

「教員免許持つててスプリングフィールド君の補佐に入れるのが俺だけだったからだ、所謂人員不足」

「はい!」

次はまき絵か

「ん?」

「センセーなのに、その服でいいんですか~?」

着流しのことか?

「いいんだよ、学園長からも何も言われてないし」

「もう良いか？ならスプリングフィールド君、授業を始めてくれ

「は、はい！」

さて、お手並み拝見と行こうか

んー、ネギ君流石に落ち込むだらうなあ……  
授業が何も進まなかつたし、生徒にまだ教師として見られてないか  
ら自分の言葉も通らない  
わて、これがひどいなる」とやうに……

ん？あればのどか…

階段から落ちるイベントか！

思い出した瞬間、俺はトップスピードで走り出した

「あやー！」

間に合わないと思つたが、視界の端でネギ君が魔法を使つてこるので  
が見えた

「これならー！」

ネギ君の魔法で落下速度が緩まつたのどかを受け止める

「大丈夫か？」

言いながらのどかを降ろす

「は、はい、痛！」

“ついやうやう足を挫いたらしこ

んー、抱えて保健室かな

「ナニ、シテ我慢する？」

そう言ってのどかを所謂お姫様抱っこで抱える

「あの… おつがどい？」や二話す――

「気にすんな、副担任の勤めだ」

そして保健室へ向かって行つた

その頃、ネギ君が大変な目に会つてるのは別のお話

## 原作突入！（後書き）

思つたんですが、原作読んでないと話解りませんよね、この小説

ネギ君、教員として流石にそれは……（前書き）

毎回毎回短くてスママセソ

ネギ君、教員として流石にそれは…

やあ皆、久しぶりだな

今俺はネギ君を田の前に正座させてるとこだ

今からスーパー説教タイムなんだよ

え？ ネギ君が何をしたかつて？

アスナへの英語ダメなんですね～、のイベントだよ

「さて、スプリングフィールド君、俺の言いたいことは分かるかい？」

「いえ……」

「スプリングフィールド君、君はせっしきの授業で神楽坂君に『英語がダメ』と言つたな？」

「はい、言いました」

「確かに不得意な奴を授業中に指して答える事も必要だ、しかし、『ダメ』とはなんだ、そんな指摘の仕方では言われた生徒は恥をかくばかりか不登校になりかねん、それにだ、君は教師としての自覚が足りない、教師とは、物事を正しく教える師、それなのに君は『ダメ』と言つた、その言葉は生徒の伸びる筈の芽を切り落とすのと同じだ、マギスティル・マギになるために教師をやる？仕方なく教師をやる？ふざけるなよ！」俺達教師つてのは親御さん達から大切な芽を預かってんだ、その芽を潰すような事しか出来ないなら国へ帰れ、それでも努力し生徒に取つていい教師になると云つなら俺は協力を惜しまない

一気に言い過ぎたか？

しかし、これもネギ君の成長の為だ…  
これを糧に伸びてくれると良いんだが…

（ネギ視点）

俺は協力を惜しまない

凄い…正直、耳の痛い言葉ばかりだ…  
何故、有馬先生は僕にここまでしてくれるのでだろうか?  
ここに来たときのアスナさんの事もだ…

「何故…僕にここまでしてくれるんですか…？」

すると有馬先生はタバコに火をつけながら

「教師…だからかな」

と言いニカツと笑つた…

カツコいい…そう思つた

魔法使いとしては父さんのように

先生としては有馬先生のようになりたいと…

「何故…僕にここまでしてくれるんですか…？」

「何故、か…」

正直な所は原作見て、これじゃ駄目だと思ったからなんだが…それ以外の感情で言うなら、俺は教師だからかな～

俺の愛煙、カプリメンソール スーパースリムに火を付け、ネギ君に言つ

「教師…だからかな」

さて、ネギ君はどうするかな？

「有馬先生！僕、頑張ります！やがらせてください！」

おおづ、凄い気迫だ

「そうか、なら困った時や迷った時は遠慮なく俺を頼れ」

「はい！」

うむ、これで良い方向へ進んでくれるといいかな

フーっと煙を吐きその場を後にする

中庭

中庭で寛いでいると

「有馬先生！」

む、この声はハルナか

「なんだ？早乙女君」

後ろには夕映とのどかもか

「先生の授業で質問が…」

「おお、言つてみろ」

タバコの火を消し、携帯灰皿に入れる

「あ、私じゃなくてのどかなんですか？」

「ん、で？質問とは？」

「は、はー。ここなんですが…」

お、のどかの髪型が変わっている  
やつぱ、こいつのが可愛こよな～

「ああ宮崎君、髪型えたんだな

「へー？あ、はー」

「可愛いんだから顔隠してたら勿体無いぞ？」

溢れんばかりの父性でつい頭を撫でてしまった

「はい」

ボンバーと音を立て顔を赤くしたのどかは逃げ出してしまった

「わう、中学生にもなって頭を撫でられるのははずかしかったか？  
まだ質問も聞いてないのに悪いことをしたなあ

いやマジで  
ハルナたちものどかを追いかけてつたし……  
仕事に戻るか

ネギ君、教員として流石にそれは……（後書き）

これからはもっと頑張ってみます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7287q/>

チート野郎の異世界を巡る旅～ネギま！編～

2011年5月26日04時46分発行